

地方道改築（一）羽咋田鶴浜線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

志賀町

二所宮サンマイダ遺跡

2017

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

にしよのみや
二所宮サンマイダ遺跡

2017

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は二所宮サンマイダ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県羽咋郡志賀町二所宮地内である。
- 3 調査原因は地方道改築事業一般県道羽咋田鶴浜線であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成26(2014)年度から、平成28(2016)年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部道路建設課が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当グループ(以下G)・担当者(当時)は下記のとおりである。
期 間 平成26年11月4日～平成27年1月5日
面 積 830㎡
担 当 調査部県関係調査G
担当者 立原秀明(主幹)、瀧野勝利(専門員)
- 7 出土品整理は、平成27年度に実施し、調査部県関係調査Gが担当した。
- 8 報告書の作成は平成28年度に実施し、調査部県関係調査Gが担当した。執筆分は、下記のとおりである。編集は立原が行った。刊行は平成28年度に実施し、調査部県関係調査Gが担当した。
第2章：増永佑介(嘱託調査員)
上記以外：立原
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。
石川県土木部道路建設課、石川県中能登土木総合事務所、政氏友成
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.(東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真とで対応する。なお、実測番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。
 - (4) 参考文献は第4章末に一括して記載した。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	7
第1節 調査の方法	7
第2節 層序	7
第3節 遺構と遺物	11
第4章 総括	28

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 調査地位位置図	1	第12図 上層平面図No.1 (S=1/80)	18
第2図 遺跡位置図	3	第13図 上層平面図No.2 (S=1/80)	19
第3図 周辺の遺跡	4	第14図 上層平面図No.3 (S=1/80)	20
第4図 調査区割・グリッド配置図	8	第15図 上層平面図No.4 (S=1/80)	21
第5図 調査区断面図1	9	第16図 下層平面図No.3 (S=1/80)	22
第6図 調査区断面図2	10	第17図 下層平面図No.4 (S=1/80)	23
第7図 遺構実測図	12	第18図 下層平面図No.5 (S=1/80)	24
第8図 中央部包含層遺物取り上げ区割図	12	第19図 下層平面図No.6 (S=1/80)	25
第9図 遺物実測図1 (S=1/3)	13	第20図 下層平面図No.7 (S=1/80)	26
第10図 遺物実測図2 (S=1/3)	14	第21図 下層平面図No.8 (S=1/80)	27
第11図 遺物実測図3 (S=1/3)	15		

表 目 次

第1表 調査・整理体制	2	第5表 土器等観察表(2)	17
第2表 周辺の遺跡一覧(1)	5	第6表 土製品観察表	17
第3表 周辺の遺跡一覧(2)	6	第7表 石製品観察表	17
第4表 土器等観察表(1)	16		

図 版 目 次

図版1 調査区遠景	図版6 中央部南側、北部トレンチほか
図版2 モザイク写真	図版7 中央トレンチ、土層断面、作業風景ほか
図版3 北部・中央部北側上層	図版8 出土遺物1
図版4 南部、中央部北側上層・下層	図版9 出土遺物2
図版5 中央部北側下層、同南側	

第1章 調査の経緯と経過

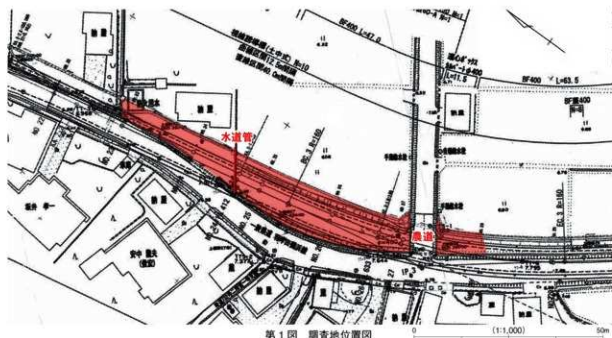
第1節 調査の経緯(第1回)

本遺跡の発掘調査は、石川県土木部道路建設課(以下道路建設課)が所管する地方道改築事業一般県道羽咋田鶴浜線に伴い、石川県教育委員会(以下県教委)及び公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(以下埋文センター)により実施されたものである。

道路改築事業は、一般県道羽咋田鶴浜線のうち、羽咋郡志賀町二所宮地内の幅員狭小区間を解消し、通行車両の安全性向上を目的として道路幅員を拡幅することが目的とされている。

例年、石川県教育委員会文化財課(以下文化財課)では文化財保護の観点から、関係機関に次年度の事業内容について照会を行っている。平成24年度に羽咋田鶴浜線の工事計画が道路建設課より提示され、平成25年1月に文化財課は事業予定地において分布調査が必要である旨を回答している。同年9月に工事を主管する中能登土木総合事務所より文化財課へ二所宮地内の分布調査依頼が提出され、同年11月に文化財課は分布調査を実施し、その結果として新規の埋蔵文化財包蔵地である二所宮サンマイダ遺跡が確認された旨を回答した。

協議・調整の結果、平成25年12月に中能登土木総合事務所から県教委へ文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、埋蔵文化財が確認された830㎡について発掘調査を実施することが決定された。



第2節 調査の経過

平成26年8月、石川県と埋文センターは発掘調査の委託契約を締結し、その後埋文センターは文化財保護法第92条に基づく発掘届を県教委に提出した。10月16日現地にて地元区長、中能登土木

総合事務所、文化財課、埋文センターによる発掘調査着手前の打ち合わせを行い、調査範囲、事務所・駐車場用地、現地作業での注意点などを確認した。調査予定地では、北端の防火用水曹とゴミステーションが移設されていない状況であった。これについては隣接する調査地の状況をみて文化財課で対応することとした。また、打ち合わせ中に東側の納屋へ向けて水道管が調査地を横断していることが判明し、この部分は周辺の状況をみて掘削の要否を判断することとした。これにより調査地は水道管を境に北部と中央部、調査対象外である農道を挟んだ南部の3箇所に分かれることになった。結果的に北部周辺は低湿地であることが判明したので水道管埋設箇所は掘削を要さなかった。

道路工事は平成27年度に予定されていたため、発掘調査後は埋戻しが必要であった。調査効率を考えると表土除去残土を隣接地に置くことが望ましいが、まとまった残土置き場を確保することが困難だったので、調査地から100mほど離れた事業予定地に残土を分散して置くこととした。しかし調査中の人力掘削土置き場は近隣に必要なだったので中央部の調査は切り返して行うこととした。

11月4日に発電機とポンプを借上げて、調査地の溜まり水を排水した。翌5日に北部の表土除去を行ったところ、地表から1.5mに達しても遺構面となる層がみられなかったため、トレンチを3箇所に設定し層序を確認することとした。その結果、地表から3mほどでようやくベースに達し低湿地の一角にあたる状況が判明した。調査地の狭小さから安全を考慮し、簡易的な断面図を作成してトレンチは埋め戻した。12日から作業員を入れて発掘機材の搬入や調査区の排水作業などを開始した。中央部北側は包含層を掘削しつつトレンチを設定し層序を確認したところ下層の遺構を検出した。文化財課と協議した結果、下層面として調査を行うこととなった。27日に中央部北側上層の空中写真測量を実施した。12月1日から下層面の表土除去を実施した。遺構検出の結果、下層面の遺構が少なかったため手実測により平面図を作成した。9日から中央部南側の表土除去を開始し、その残土は北部と南部の埋戻しに充てた。15日に2回目のラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。17～24日まで納屋前出入り口の復旧と調査地の埋戻しを行い、24日に中能登土木総合事務所に現場を引き渡した。翌年の1月5日に事務所等の撤去を確認し現地調査を完了した。

第3節 整理作業の経過

道路建設課から依頼を受けた県教委の委託事業として、平成27年度に出土品整理を実施した。出土品整理の内容は、記名・分類・接合、復元、実測・トレース、遺構実測図トレースなどである。平成28年度は報告書の作成・刊行を実施した。なお、遺物の洗浄は平成26年度に実施した。

発掘調査年度	平成26年度	整理年度	平成27・28年度
調査主体	公益財団法人 石川埋文センター (理事長 木下公司)	調査主体	公益財団法人 石川埋文センター (理事長 H27木下公司、H28田中新太郎)
総括	小崎隆司(専務理事)	総括	柴田政秋(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長) 山口 登(総務GL)	事務	釜利利雄(事務局長) 長嶋 誠(総務GL)
調査	福島正実(所長) 藤田邦彦(調査部長) 松山和彦(関係調査GL)	整理	福島正実(所長) 藤田邦彦(調査部長) 松山和彦(関係調査GL)
担当	立原秀明(関係調査G主幹) 巖野勝利(関係調査G専門員)	担当	立原秀明(関係調査G主幹)

第1表 調査・整理体制

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

二所宮サンマイダ遺跡は、石川県羽咋郡志賀町二所宮、於古川と安津見川が合流する大坂から南、眉丈山系丘陵の標高約7mに立地する。

志賀町は、能登半島の中央部、西海岸に位置し、平成17年(2005)に旧志賀町と富来町との合併により拡大、人口21,200人(平成28年12月時)、東西約12.7km、南北約31km、面積246.55km²となった。町の東部は丘陵地が広がり、日本海に接する北西部は小規模な沖積平野が、南西部は河岸段丘や河岸砂丘がみられる。主な河川は富来川や酒見川、米町川と於古川が神代で合流してなる神代川である。それぞれの河川は、日本海に注ぐ。

本遺跡の周囲の地形をみると、河川は主に於古川が流れ、丘陵に囲まれた盆地状の地形、または谷状の地形である。そして、矢駄・上棚・二所宮・宿女・福野・大坂・米浜・末吉・矢蔵谷・堀松などの各集落一帯に沖積地が広がる。

この沖積地の成り立ちは、旧福野湯と関係している。旧福野湯は、更新世末期に海に侵食されてきた谷が縄文海進によって再び海水面に没し、縄文時代中期から弥生時代にかけて海水面が低下していくことで湖化し残ったものである。旧福野湯の範囲やその終末時期は不明瞭であるが、その後、水位が低下していくことで、低湿地化していく。また、近年まで長雨による河川の増水で広く冠水した際に、当時の潟湖の姿が伺えた。よって、本遺跡周囲の沖積地は、旧福野湯の堆積と、その後の於古川などの河川から運搬されてくる土砂によって成り立っている。



第2図 遺跡位置図

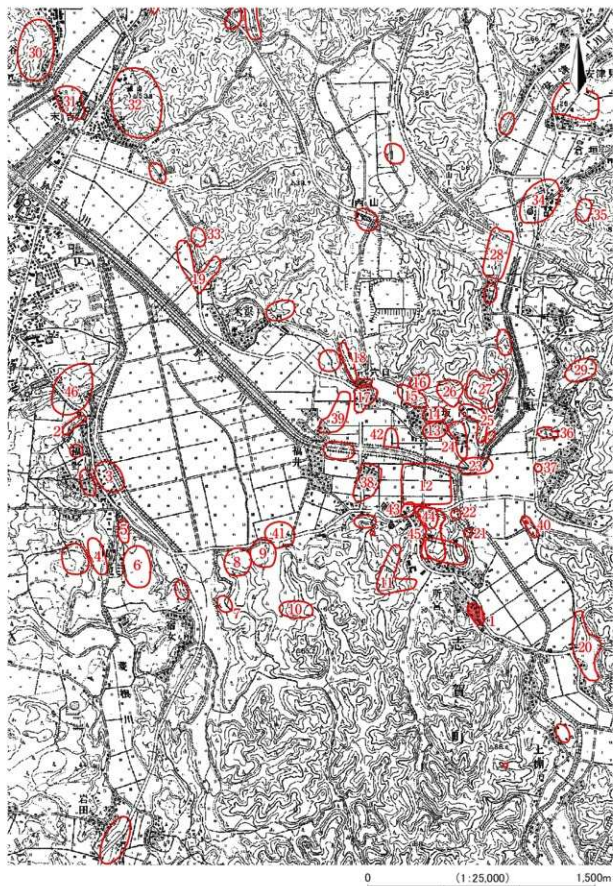
第2節 歴史的環境

旧福野湯周辺の遺跡を時代ごとにふれることで、二所宮サンマイダ遺跡周囲の歴史的環境を概観する。なお、本節の遺跡名(番号)は、第2、3表と第3図の番号に対応するため、参照して頂きたい。

縄文時代は、旧福野湯の汀線が山裾近くまで広がっていたためか、多くの遺跡が台地や丘陵に位置する。これらの遺跡は、縄文時代中期を主体とした遺跡が多く、長沢堂ヶ谷内遺跡(4)や大坂遺跡(15)などがみられる。また、堀松貝塚(1)や穴口貝塚(17)からシジミなどの貝類が出土し、旧福野湯の環境や当時の生活環境が伺える。

弥生時代は、旧福野湯の汀線が海岸に向かうが、依然として多くの遺跡が丘陵に位置する。穴口遺跡(39)では、弥生時代中期から後期を主体とした遺跡で、土錘などが出土している。鹿首モリガブチ遺跡(28)では、縄文時代晩期から弥生時代後期の小溝状跡や土坑などが沖積部みられ、古墳時代前期に流路が沖積部で、堅住居跡が台地で出現する。

古墳時代は、大坂や二所宮周辺の丘陵に古墳が多く位置する。二所宮宮山古墳群(45)は円墳6基からなり、そのうち3号墳が塚塚古墳と呼ばれる。大坂城ヶ墓古墳群(27)は、円墳14基以上が尾根



第3図 周辺の遺跡

筋に数珠繋ぎに展開する古墳群である。これらの古墳群は、古墳時代前期から中期の古墳群と推定される。下甘田極楽寺山古墳群(11)は、円墳2基が調査され、過去に削平された古墳を含めると、少なくとも3基は存在していた。調査された円墳2基から、少なくとも古墳時代中期から後期初頭の古墳群である。

また、古墳時代の集落は、丘陵に多く位置する。上棚中村畑遺跡(20)は、古墳時代後期と平安時代後期を主体とし、掘立柱建物や土坑がみられる。角杯形須恵器という特殊な須恵器が出土している。大坂古屋垣内遺跡(24)は、古墳時代中期を主体とした弥生時代後期から古墳時代後期前半までの土器を、遺跡周囲の段丘上から各時期にわたり投棄した遺構などがみられ、周囲の段丘や丘陵に集落が存在していたことが伺える。

奈良・平安時代は、遺跡が丘陵にみられるものの、沖積平野にも現れる。大坂舟の町遺跡(12)は、時期が不確定(古墳時代後期から奈良・平安時代か)ではあるが、独木舟や舟に付属する櫂などが出土した。米浜遺跡(19)は、平安時代前期と推定される製塩土器が出土した。福井ナカミチ遺跡(41)は、平安時代前期頃の須恵器・土師器が大量に出土した。製塩土器や墨書土器なども出土し、掘立柱建物や製塩に関係した遺構などがみられる。矢駄アカメ遺跡(36)は、平安時代末から中世初頭の掘立柱建物や土坑、落ち込みないし溝状遺構がみられる。この落ち込みないし溝状遺構から土師器皿が定量出土し、陶磁器も出土した。

中世は、奈良・平安時代のように遺跡が位置するものの、より沖積平野に進出するようになる。末吉城跡(32)は、曲輪や帯曲輪状の平坦面と堀状の平坦面で構成され、東西約65m×南北約60mの規模の方形館跡と推定される。館郷堂遺跡(38)は、中世の溝や土坑などがみられ、近世の遺物が混じる遺構もみられる。中世から近世にかけて存続していた集落であり、現行の集落と位置も重なる。

よって、二所宮サンマイダ遺跡周囲の歴史的環境は、全時期を通じて、多くの遺跡が台地や丘陵や微高地に集落などを築き、およそ弥生時代後期から、徐々に旧福野潟が退いた後の低湿地を開発していく様相が伺える。

番号	遺跡名称	所在地	出土品	立地	種別	時代	備考
1	二所宮サンマイダ遺跡	二所宮	土師器	丘陵	集落	古墳	本報告の遺跡
2	福野横穴	福野	須恵器	台地	横穴墓	古墳	
3	福野前川遺跡	福野	弥生土器、須恵器、珠洲焼	沖積平野	散布地	弥生古墳 古代 中世	1971年度前川改修工事で遺物出土
4	長沢堂ヶ谷内遺跡	長沢	縄文土器(中期)、磨製石斧、打製石斧、石鏃	台地	散布地	縄文	1954年度その他発掘調査町指定史跡
5	福野経塚中世墳墓	福野	珠洲焼、古銭	台地	その他の墓	中世	
6	長沢おおくほ遺跡	長沢	縄文土器(中期)、磨製石斧、石鏃	台地	散布地	縄文	
7	宿女南山遺跡	宿女・南山	弥生土器	丘陵	散布地	弥生	
8	福井まんだら寺B遺跡	福井	五輪塔	丘陵	散布地	中世	
9	福井まんだら寺A遺跡	福井	縄文土器(中期)、石鏃	丘陵	散布地	縄文	
10	福井二塚古墳群	福井・二塚		丘陵	古墳	古墳	円墳2基よりなる
11	下甘田極楽寺山古墳群	二所宮	土師器、須恵器、鉄矛、鉄鏃、鉄斧、砥石	丘陵	古墳	古墳	1989年度町発掘調査円墳3基以上。過去に削平された1基に箱式石棺を有し、須恵器が出土したものあり
12	大坂舟の町遺跡	大坂・舟の町	丸木舟(独木舟)、舟用具、木製品	沖積平野	散布地	古墳～ 古代か	1951年度その他発掘調査町指定史跡、「大坂独木舟遺跡」ともいう
13	大坂坊の下遺跡	大坂・坊の下	土師器	沖積平野	散布地	古墳	
14	大坂坊の上遺跡	大坂・坊の上	須恵器、土師器、土師器皿	丘陵	散布地	古墳 古代 中世	

第2表 周辺遺跡一覧(1)

第2節 歴史的環境

(石川県教育委員会：教委、石川県立埋蔵文化財センター：理七、財団法人石川県埋蔵文化財センター：財理)

番号	遺跡名称	所在地	出土品	立地	種別	時代	備考
15	大坂遺跡	大坂	縄文土器、石鏃、石鏢玉、鳥骨、シジミ貝、磨製石斧	丘陵	散布地	縄文	1954年度その他発掘調査 2000年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査、「大坂オハタケ遺跡」ともいう
16	大坂オハタケ古墳群	大坂		丘陵	古墳	古墳	円墳4基以上よりなる(径10～14m)
17	穴口貝塚	穴口	弥生土器、石器、須恵器、シジミ貝	沖積平野	散布地	縄文 弥生 古墳	2000年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査
18	穴口古墳群	穴口	1号墳より須恵器	丘陵	古墳	古墳	2001年度県(財理)発掘調査 8基よりなる
19	米浜遺跡	米浜	須恵器、土師器、製塩土器、砂石、縄文土器、石鏢、石斧、弥生土器、木製品	沖積平野	散布地 集落	縄文 弥生 古墳 古代	1979年度県(理七)・2005年度県(財理)発掘調査
20	上郷中村畑遺跡	上郷・中村	石瓶、玉、弥生土器、須恵器(鳥骨形須恵器ほか)、土師器、陶磁器、土師貫土、石器、木製品	沖積平野	散布地 集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世	1980年度県(理七)発掘調査
21	二所宮日誌遺跡	二所宮	土師器、須恵器、土鏢	丘陵	散布地	古墳	
22	二所宮日誌用水道跡	二所宮	須恵器(双耳瓶)	丘陵	散布地	古代	
23	大坂A遺跡	大坂	縄文土器(中期)、須恵器(双耳瓶、黒書土器等)、瑞花反風八枚鏡	沖積平野	散布地	縄文 古代	1994年度町発掘調査
24	大坂古屋敷内遺跡	大坂・古屋敷内	弥生土器、土師器、須恵器、珠肉焼、白磁、木製品	丘陵	散布地 集落	弥生 古墳 古代 中世	2002年度県(財理)発掘調査 2003年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査
25	大坂やちだ遺跡	大坂		丘陵	散布地	古墳	2003年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査
26	大坂寺畑遺跡	大坂・寺畑	土師器	丘陵	散布地 集落	古墳	2003年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査
27	大坂城ヶ墓古墳群	大坂・城ヶ墓		丘陵	古墳	古墳	円墳14基以上よりなる(径16～18m)
28	鹿首モリガフチ遺跡	矢駄・鹿首	縄文土器、甕貯漆器、弥生土器、土師器、石器、管玉、自然遺物	丘陵	散布地 集落	縄文 弥生 古墳	
29	矢駄瀬戸山遺跡	矢駄・鹿首	石斧	丘陵	散布地	縄文	
30	棚松貝塚	棚松	縄文土器(中期、後期)、石鏃、磨製石斧、貝輪、打製石斧、ヤマトシジミ他	丘陵	貝塚	縄文	1994年度町発掘調査一部14町指定史跡
31	末吉館畑遺跡	末吉	土師器、須恵器、中世陶磁器	沖積平野	散布地	古代	1985年度町・2001年度県(財理)発掘調査 2000年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査
32	末古城跡	末吉		丘陵	城館	中世	平田面、壘等遺存
33	米浜クルマダ遺跡	米浜	製塩土器	丘陵	散布地	古代	
34	倉垣遺跡	倉垣	弥生土器、土師器、須恵器、水鳥形土製品、管玉、石器	丘陵	散布地	弥生 古墳	1978年度町発掘調査
35	倉垣コマクラベ1号窯跡	倉垣	須恵器、土師器	丘陵	生産 遺跡	古代	
36	矢駄アカメ遺跡	矢駄	縄文土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器、土鏢、鉄器	丘陵	集落	縄文 古代	1994年度県が県営は場整備事業に係り分布調査 1995年度県(理七)発掘調査
37	矢駄イケダ遺跡	矢駄	土師器	丘陵	散布地	その他	1994年度県が県営は場整備事業に係り分布調査 1995年度県(理七)発掘調査
38	船塚堂遺跡	館	弥生土器、須恵器、土師器、中世土師器、珠肉焼、陶磁器、石製硯、曲物	扇状地	散布地 集落	弥生 古墳 古代 中世 近世	2000年度県(財理)発掘調査
39	穴口遺跡	穴口	弥生土器、石器、中世土師器、木製品	沖積平野	集落	弥生 中世	2001年度県(財理)発掘調査
40	矢駄南古墳群	矢駄		丘陵	古墳	古墳	6基よりなる。「矢駄杉谷内古墳群」ともいう
41	福井ナカミナ遺跡	福井	縄文土器、土師器、須恵器、製塩土器、木製品、帯金具、石製品	沖積平野	散布地 集落	縄文 古墳 古代	2001年度県(財理)発掘調査 2011・12年度県(財理)発掘調査
42	館B遺跡	館		扇状地	集落	中世	1999年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査
43	大坂舟の町B遺跡	大坂		扇状地	集落	古墳 古代	1999年度県(教委)が県営は場整備事業に係り分布調査
44	土田城跡	二所宮		丘陵	城館	中世	
45	二所宮山古墳群	二所宮		丘陵	古墳	古墳	円墳6基よりなる
46	大念寺跡	福野		丘陵	社寺	中世	

第3表 周辺遺跡一覧(2)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法(第1・4・8図)

遺跡は眉丈山系の丘陵裾に立地しており、東方は旧福野湯からのびる低湿地が広がっている。二所宮集落はこの丘陵裾に展開しており、集落を南北に縦断する羽咋田鶴浜線の一部がこの丘陵裾と低湿地の境を通過している。調査地はこの道路東側に位置しており、南北の長さ90m、最大幅12m、面積830㎡である。周辺状況から元々は低湿地だった場所を埋め立てたものとみられ、調査着手時は田地と盛土造成された宅地となっていた。

調査は農道と水道管が横断する箇所があることから、三分割することとなった。特にそれぞれの調査区名を付けなかったため、本報告では北部、中央部、南部、さらに中央部は南北に分けて調査を行ったので、中央部北側と中央部南側と呼称する。

表土除去作業は、バックホーを使用した。1回目は北部、中央部北側、南部について実施し、北から南に向けて進み、残土は100mほど離れた事業地に分散して仮置きした。2回目は中央部北側下層面まで重機により掘り下げた。時期的に天候が良くない日が続き、地盤が安定しない状況であったため掘り下げ作業は難航した。3回目は中央部南側の表土除去を行い、この時の残土で北部、中央部北側、南部の埋戻しを行った。

表土除去後は、人力による包含層掘削、遺構検出・掘削を実施し、必要に応じて断面図作成や写真撮影を行った。遺構には、土坑(SK)、小穴(P)などの略号を使用した。

なお、中央部の包含層出土遺物については、掘削作業の進捗がグリッド杭の設置よりも早かったため任意で5m間隔の区画を設定し取り上げを行った。遺物観察表にある取り上げ地区は第8図と対応する。掘削完了後は、ラジコンヘリによる空中写真測量を実施した。

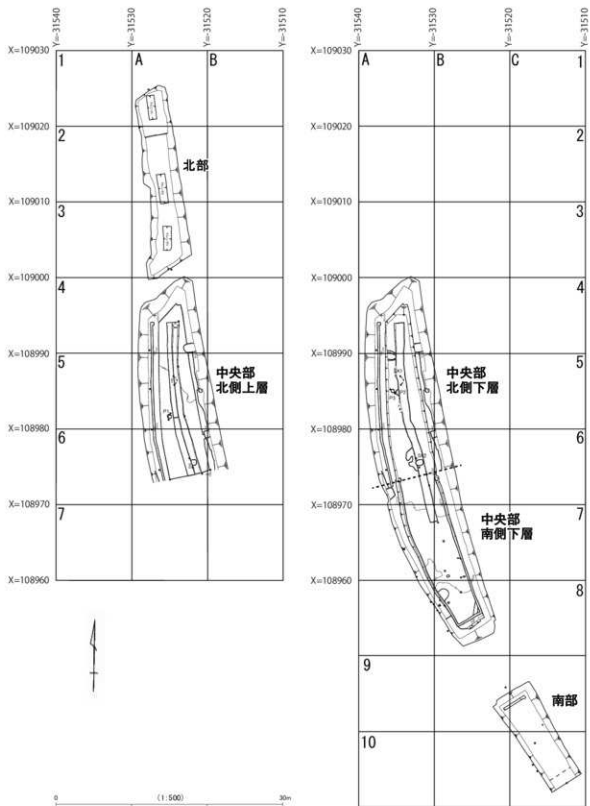
グリッド杭は、南北ラインの北から南へ10m毎にアラビア数字を、東西ラインは西から東へ10m毎にアルファベットを付し、基点を10m四方の南西隅に設定した。

第2節 層 序(第5・6図)

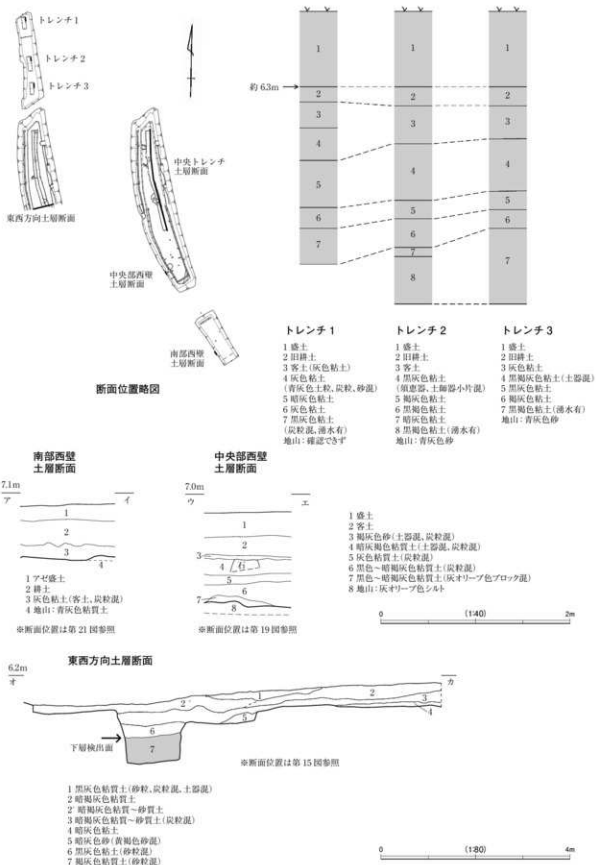
地形的に高い南部から低い北部にむけての層序を概観すると、南部は、耕土・客土の直下で地山の灰色粘質土がみられ、中央部にみられる包含層などは削平されている。中央部は盛土・客土の下に土器を含む暗灰色粘質土が堆積する。その下に厚さ0.4～0.8mほどの暗褐色系土を挟み褐色系土の下層面が存在する。地山はさらに0.6～0.8mの深さで灰オリーブ色系土が確認できる。

北部は地表から深さ1.3mほどで少量の土器を含む層を確認したが、ベースとなるような層はみられず、下位には粘土層が厚く堆積しており低湿地の堆積土とみられる。地表から3.1mほどで青灰色砂を確認したが、地山であるかは不明である。

下層検出面の標高は、南部の南端6.4m、同北端5.7m、中央部南端5.9m、同中ほど5.5m、同北端5.0m、北部南端4.2mである。中央部については西の集落側が若干高いものの、南が高く北に下がる地形である。上層は中央部北側の南端で5.7m、同北端5.5m、北部南端5.9mほどである。



第4図 調査区割、グリッド配置図



第5図 調査区断面図1



断面位置は第17・19号参照

- 東方向上層面の地誌
- 8 暗灰色粘質土(炭粒混在)
 - 9 黒灰色粘質土
 - 10 明ケリープ色粘質土(炭粒混在)
 - 11 明ケリープ色シルト-粘質土
 - 12 暗灰色粘質土
 - 13 暗灰色粘質土(炭粒混在)
 - 14 暗灰色粘質土(炭粒混在)
- 15 暗灰色粘質土(炭粒混在)

16 暗灰色粘質土(炭粒混在)

17 暗灰色粘質土(炭粒混在)

18 暗灰色粘質土(炭粒混在)

19 暗灰色粘質土(炭粒混在)

20 暗灰色粘質土(炭粒混在)

21 暗灰色粘質土(炭粒混在)

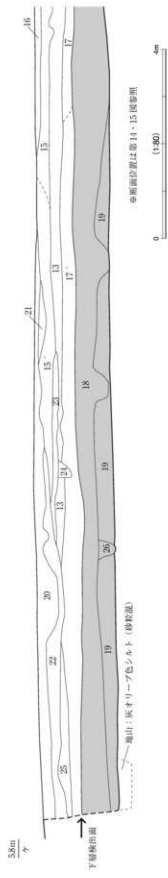
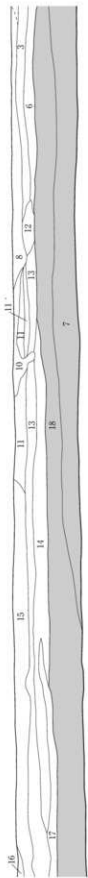
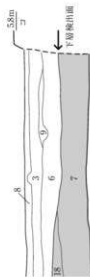
22 明ケリープ色粘質土(炭粒混在)

23 暗灰色粘質土(炭粒混在)

24 暗灰色粘質土(炭粒混在)

25 暗灰色粘質土(炭粒混在)

26 明ケリープ色シルト(砂粒混在)



第6図 調査区断面図2

第3節 遺構と遺物

遺構は中央部北側下層に集まっていた。上層ではP1が検出されたのみで、これ以外は下層の遺構である。他には、中央部南側や南部で径10cm前後の浅い小穴が数基と中央部南側の南端で南北方向の浅い溝を検出した。

SK1 (第7図) A6グリッドで検出した。中央トレンチの掘削時に検出したもので、下層に伴う遺構である。トレンチ掘削時に半分を掘り下げてしまい、残る南半分を重機による上層土除去の際に壊してしまったため全掘することができなかった。断面図とトレンチ下場で復元した平面形から径0.9m、深さ0.42mを測る円形の土坑とみられる。

SK2 (第7図) A7グリッドで検出した。平面は楕円形を呈し長径1m、壁は急な立ち上がりで深さ0.46mを測る。明確な出土遺物は無かったのだが、1の縄文土器がSK2の周囲から出土している。

P1 (第7図) A6グリッドで検出した上層面の遺構である。平面は楕円形を呈し長径0.62m、深さ0.33mを測る。全体的に土器が含まれ、モモとクルミとみられる種実も1点ずつ出土した。遺物は3・49の2点を図化した。

P2 (第7図) A6グリッドで検出した。北半分を重機による2回目の表土除去の際に壊してしまったが、およそ平面は円形を呈していたものとみられ径0.91m、深さ0.19mを測る。

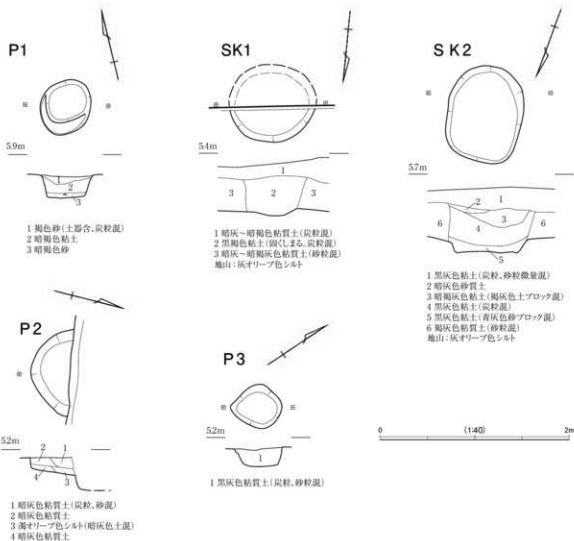
P3 (第7図) A6グリッドで検出した。平面はやや不整な円形を呈し径0.54m、深さ0.18mを測る。

遺物は、LⅡ型パンケース(647×450×145mm)で9箱の出土があった。内訳は上層包含層の出土土器が約9割であり、古墳時代終末期、奈良・平安時代の土器が大部分を占め、縄文土器、弥生土器、中世の土器などが極少量出土した。土製品では土鍾が18点出土しており、そのうちの5点を図示した。石製品は4点のうち2点を図示した。

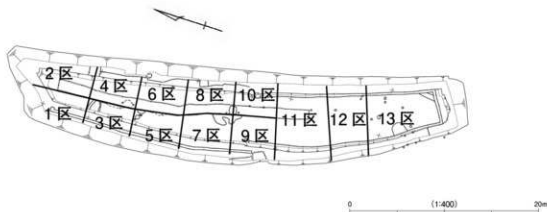
1は縄文土器である。SK2に近い中央トレンチの下位掘削時に出土した。波状口縁下部に横位の沈線、その下に同心円状の模様を沈線で表す。時期は晩期前葉の御経塚式期とみられる。2～8は土師器甕の口縁部付近で9・10は底部付近の破片である。11は外底面の設置部分が小さいことから弥生土器とみられる。12・13は体部の曲り具合から壺であろう。14・17はカマドの破片である。厚い器壁と粗いハケが特徴であり、胎土は砂粒を多く含む同一個体の可能性が高い。15・16は、把手である。16の胎土は14・17と同じものとみられるが、15は砂粒をほとんど含まないので別個体である。18は支脚である。19・20は須恵器甕の破片である。21は瓶の口縁部。22～23は瓶の底部。24は平瓶の体部片とみられる。25～30は古墳時代終末期の須恵器蓋坏である。31～39は8世紀前後の蓋と坏、40～45は8・9世紀代の坏である。46の壺は内外面に赤彩痕が残る。47・48は平安時代の土師器壺。49～52は土師器の高坏。53・54は須恵器の高坏で、54は対面する細長い透かしが上下4箇にあるが、上部の透かしは貫通しておらず断面三角の切り込みになっている。55は土師皿で中世の所産である。図示していないが表土除去中に珠洲焼甕の体部片も出土している。

56～60は土師質の土鍾である。前述したとおり計18点が出土し、そのうちの4点が大きく欠損するが、大きさに顕著な違いはなく図示した5点が標準的なサイズである。長さは56が3.85cmで最も短く、60が最も長く6.1cm、幅は2cm前後でまとまっている。出土地点は1区7点、2区2点、3区4点、中央トレンチ5点であり、低湿地に近い中央部北端に片寄りがある。

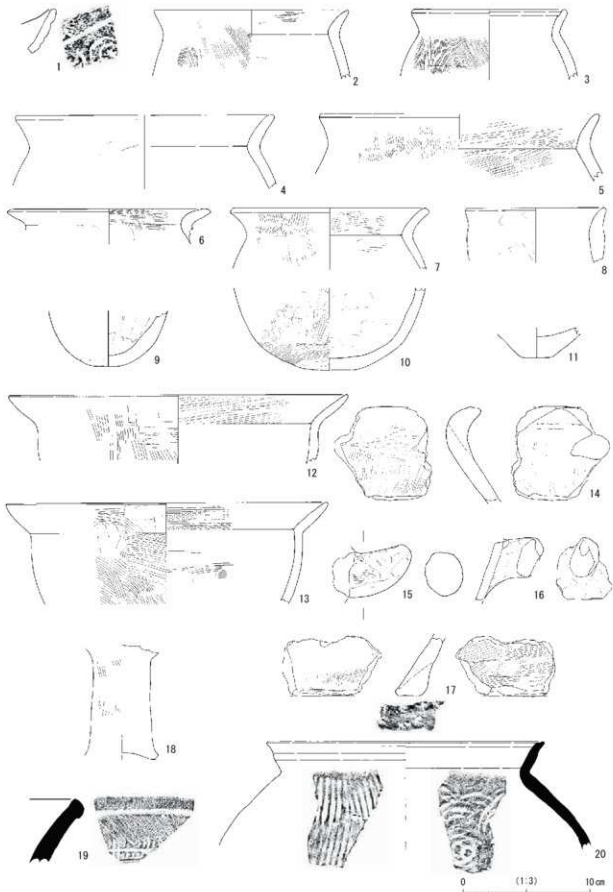
石1は凝灰岩の砥石である。北部の検出面からの出土である。石2は安山岩のすり石である。そのほかに、図示していないが軽石が2点出土している。



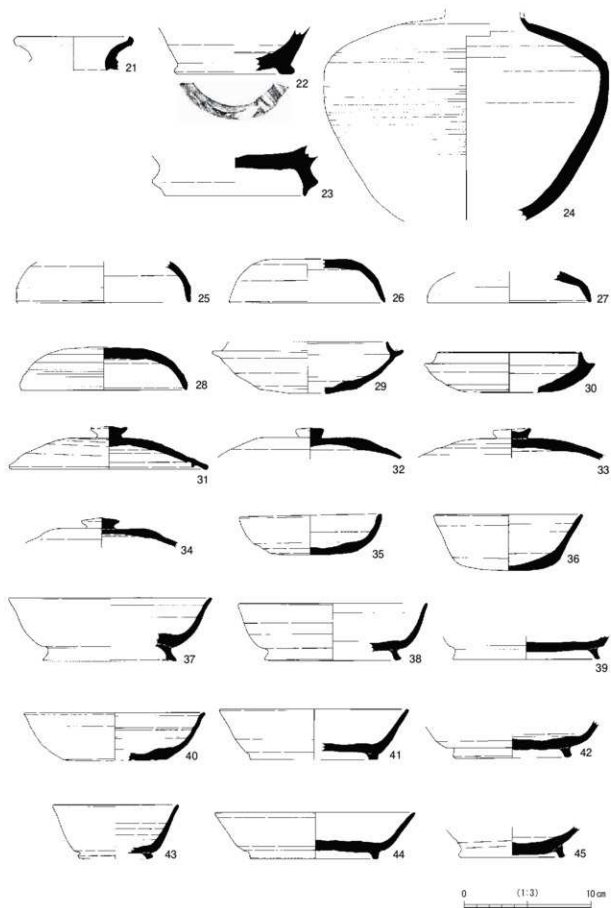
第7図 遺構実測図



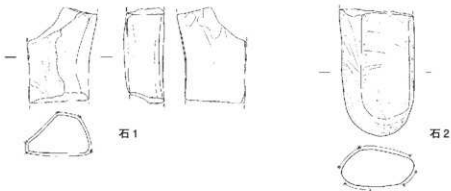
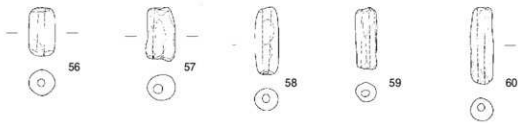
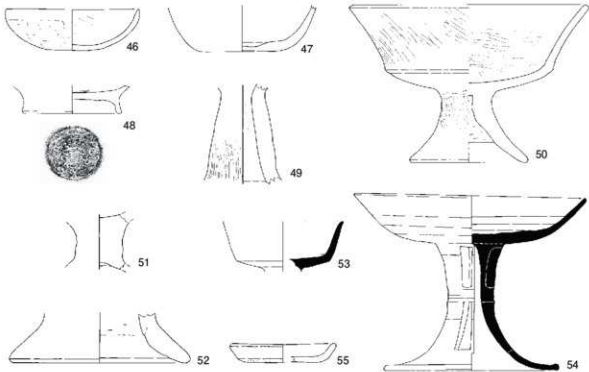
第8図 中央部包含層遺物取り上げ区割図



第9図 遺物実測図1 (S=1/3)



第10図 遺物実測図2 (S=1/3)



第11図 遺物実測図3 (S=1/3)

測点番号	種類	器 材	測機特 性	取の上 げ高さ (cm)	口径 (cm)	直径 (cm)	標高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	塗成	調査 (内)	調査 (外)	備考	測点番号
1	鋼文	鉄	中央トレンチ	7区	-	-	(40)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	員	ナナ	ナナ		D43
2	土脚砂	葉	包含層	3区	(15.4)	-	(55)	腐灰質	腐灰質	員	ナナ	ナナ、ハケ		D23
3	土脚砂	葉	PI	1区	120	-	(56)	灰質層	腐灰	員	ナナ	ナナ、ハケ		D45
4	土脚砂	葉	包含層	1区	(20.2)	-	(49)	炭酸層	層	員	塗料不明	ナナ		D10
5	土脚砂	葉	包含層	3区	(22.0)	-	(53.5)	にぶい黄緑	浅黄	員	ナナ、ハケ	ナナ、ハケ		D22
6	土脚砂	葉	包含層	5区	15.1	-	(28)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	員	ナナ、ハケ	ナナ、ハケ		D14
7	土脚砂	葉	包含層	1区	15.8	-	(49)	炭酸層	浅黄層	員	ナナ、ハケ	ハケ	外面露行着	D7
8	土脚砂	葉	包含層	1区	10.6	-	(44)	砂	砂	員	塗料不明	ナナ、ハケ		D19
9	土脚砂	葉	包含層	3区	-	-	(44)	灰白	にぶい黄緑	員	ナナ	ハケ		D25
10	土脚砂	葉	包含層	5区	-	4.3	(65)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	員	ナナ	ハケ		D33
11	粘土か	葉	包含層	1区	-	2.4	(24)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	員	ナナ	塗料不明	外向面露行着	D33
12	土脚砂	葉	包含層	5区	26.7	-	(55)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	員	ナナ、ハケ	ナナ、ハケ	外面露行着	D00
13	土脚砂	葉	包含層	5区	25.3	-	(80)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	員	ナナ、ハケ	ナナ、ハケ	外面露行着	D15
14	土脚砂	葉	包含層	2区	-	-	(7.4)	明層	にぶい黄緑	員	ナナ、ハケ	ナナ、ハケ	外面露行着	D18
15	土脚砂	把手	包含層	6区	最大径(4.2)	最大径(6.2)	最大径(3.4)	-	-	員				D35
16	土脚砂	把手	中央トレンチ	2区	-	-	(50)	腐灰	にぶい黄緑	員	ナナ、ハケ	ナナ、ハケ		D42
17	土脚砂	カマド	包含層	7区	-	-	(46)	灰質層	にぶい黄緑	員	ナナ、ハケ	ナナ、ハケ		D17
18	土脚砂	葉	包含層	7区	-	-	(9.1)	黒	赤層	員	ハケ	ハケ		D36
19	須砂	葉	包含層	6区	-	-	(50)	灰	灰	員	ヨコナナ	ヨコナナ	格子文、破状文	D56
20	須砂	葉	包含層	1区	21.8	-	(86)	灰	灰	員	ヨコナナ、同心円タタキ	ヨコナナ、平行タタキ		D2
21	須砂	葉	包含層	9区	(8.8)	-	(26.5)	灰	灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ	内面、外面露行	D37
22	須砂	葉	包含層	13区	-	8.9	(37)	灰白	灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ、ケズリのちナナ		D38
23	須砂	葉	包含層	13区	-	11.1	(40)	灰	灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ、ケズリのちナナ		D52
24	須砂	平軌	包含層	3区	測点径10	-	(16.2)	灰	灰	員	ロクロナナ、同心円タタキ	ロクロナナ、ケズリ		D65
25	須砂	葉	包含層	6区	13.6	-	(32)	灰質層	灰質層	員	ロクロナナ	ロクロナナ		D68
26	須砂	葉	中央トレンチ	12区	-	-	3.5	灰白	灰白	員	ロクロナナ	ロクロナナ		D30
27	須砂	葉	中央トレンチ	12区	-	-	(25)	灰白	灰白	員	ロクロナナ	ロクロナナ		D53
28	須砂	葉	包含層	1区	130	-	33	灰白	灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ、同心ケズリ		D3
29	須砂	葉	包含層	7区	126	7.8	4.1	明赤層	明赤層	員	ロクロナナ	ロクロナナ、同心ケズリ		D9
30	須砂	葉	中央トレンチ	11.7	8.3	3.2	浅黄	にぶい黄緑	にぶい黄緑	員	ロクロナナ	ロクロナナ、同心ケズリ		D27
31	須砂	葉	中央トレンチ	3区	(15.5)	-	3.4	灰白	にぶい黄緑	員	ロクロナナ	ロクロナナ、ケズリ	並み有り	D24
32	須砂	葉	包含層	3区	-	-	(25)	灰	灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ、同心ケズリ	外面露行	D23
33	須砂	葉	中央トレンチ	2区	-	-	(23)	腐灰	腐灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ、ケズリ		D41
34	須砂	葉	包含層	2区	-	-	(23)	腐灰	腐灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ		D16
35	須砂	無台付	包含層	5区	11.0	6.2	3.2	灰	灰	員	ロクロナナ	ロクロナナ、同心へう切り後ナナ	重ね焼き痕	D29

第4表 土器等観察表(1)

報告番号	種類	器種	遺構等	取り上げ地区	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	組成	調査 (内)	調査 (外)	備考	実測番号
36	須恵器	碗	包含層	6区	11.7	7.3	4.5	灰	灰	木片	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ取り後ナデ		D32
37	須恵器	有台杯	包含層	1区	16.0	10.7	5.0	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		D8
38	須恵器	有台杯	包含層	1区	14.9	10.8	4.55	灰褐色	褐色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		D5
39	須恵器	中央トレンチ		-	11.6	11.8		灰	灰	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		D40
40	須恵器	有台杯	包含層	1区	14.2	8.2	3.85	靑	靑	不長	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り		D1
41	須恵器	有台杯	包含層	9区	14.8	10.0	4.0	灰	灰	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		D28
42	須恵器	有台杯	表土除去	-	9.4	(29)		灰	灰	貝	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ取り		D49
43	須恵器	有台杯	表土除去	9.8	5.0	4.3	灰白	灰	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		D54
44	須恵器	有台杯	包含層	1区他	15.7	10.2	3.7	灰	灰	貝	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ		D11
45	須恵器	有台杯	包含層	1区	-	8.5	(24)	灰	灰	貝	ロクロナデ	ナズリのみナデ		D4
46	土師器	碗	包含層	6区	10.4	4.9	3.3	にぶい、靑	にぶい、靑	貝	ナデ	ナデ、ナズリ	内外面赤彩	D33
47	土師器	有台杯	包含層	2区	-	7.0	(37)	黒靑	靑	貝	ロクロナデ	底部赤彩りか		D36
48	土師器	有台杯	表土除去南側	-	7.9	(22)		靑	靑	貝	ナズリ	回転赤彩り		D47
49	土師器	高杯	P1	-	-	(79)		靑	靑	貝	不明	不明		D46
50	土師器	高杯	中央トレンチ	1区	18.3 (最大19)	9.2	12.6	にぶい、靑	にぶい、靑	貝	ミガキ、ナズリ、ナデ	ミガキ、ナデ、ハナ		D44
51	土師器	高杯	包含層	1区	基部付4.5	-	(44)	黒	黒	貝	ハナ	不明		D12
52	土師器	高杯	包含層	3区	-	(13.6)	4.0	灰白	灰白	貝	不明	不明		D23
53	須恵器	高杯	包含層	1区他	9.4	-	(40)	靑灰	靑灰	貝	ロクロナデ	ロクロナデ		D6
54	須恵器	高杯	表土除去	(18.2)	14	14.2	灰	灰	灰	貝	ロクロナデ	ロクロナデ、化粧	透かし上下4ヶ所、上2ヶ所は胎貫通	D48
55	土師器	皿	包含層	13区	(8.0)	5.5	1.5	にぶい、靑	靑	貝	不明	不明		D39

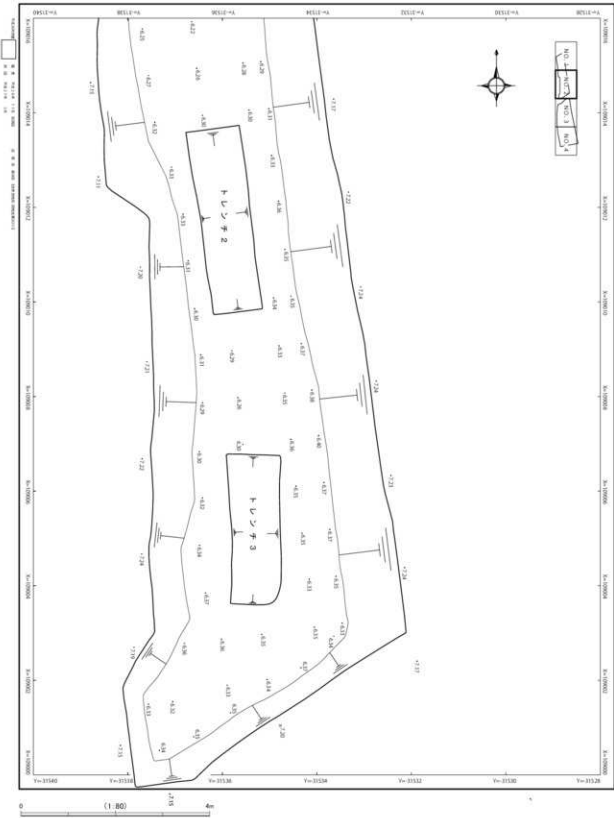
第5表 土器等観察表(2)

報告番号	種類	器種	遺構等	取り上げ地区	最大径 (cm)	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調 (外)	焼成	調査 (外)	実測番号
56	土師器	土罐	中央トレンチ	3.85	2.1	2.05	17.55	黒灰	貝	ナデ	D56	
57	土師器	土罐	包含層	2区	4.3	2.4	2.1	22.08	灰黄	貝	ナデ	D59
58	土師器	土罐	包含層	3区	5.4	1.9	1.8	17.06	灰黄	貝	ナデ、指面圧痕	D57
59	土師器	土罐	包含層	2区	4.9	1.8	1.5	12.49	にぶい、靑	貝	ナデ	D58
60	土師器	土罐	包含層	1区	6.1	1.9	1.8	18.55	にぶい、靑	貝	不明	D60

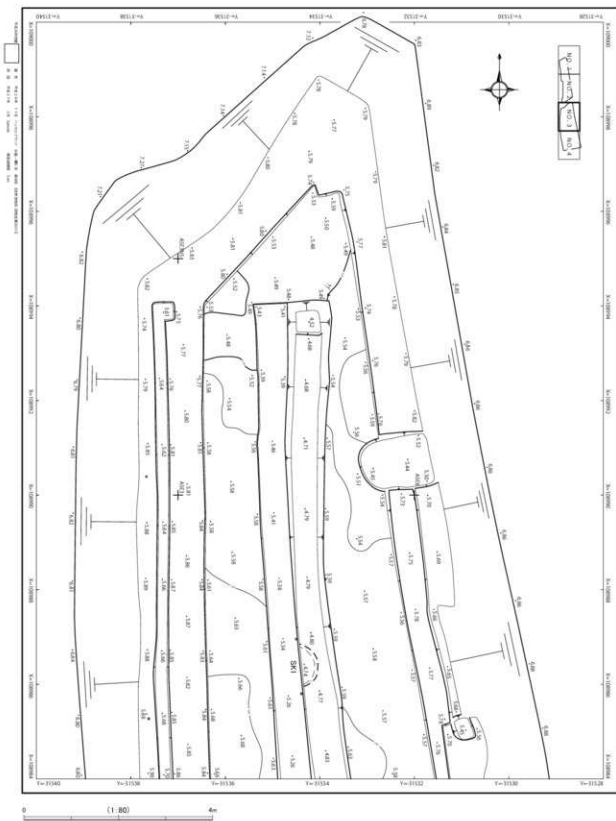
第6表 土製品観察表

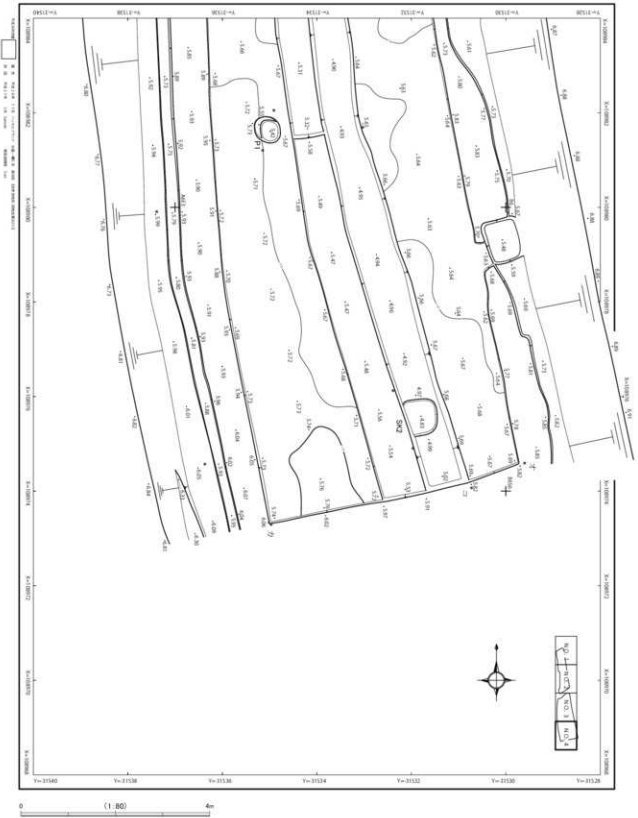
報告番号	種類	遺構等	取り上げ地区	最大径 (cm)	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	実測番号
石1	砥石	北部畑出面	7.5	5.5	3.2	162.17	凝灰岩	石1	
石2	千石	中央部北側	2区	10.2	6	3	317.8	安山岩	石2

第7表 石製品観察表

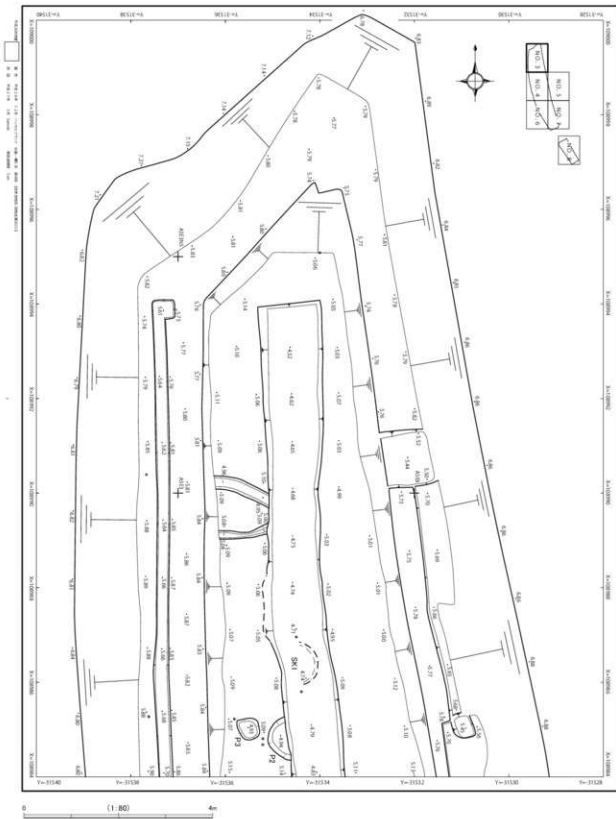


第13図 上層平面図No 2 (S=1/80)

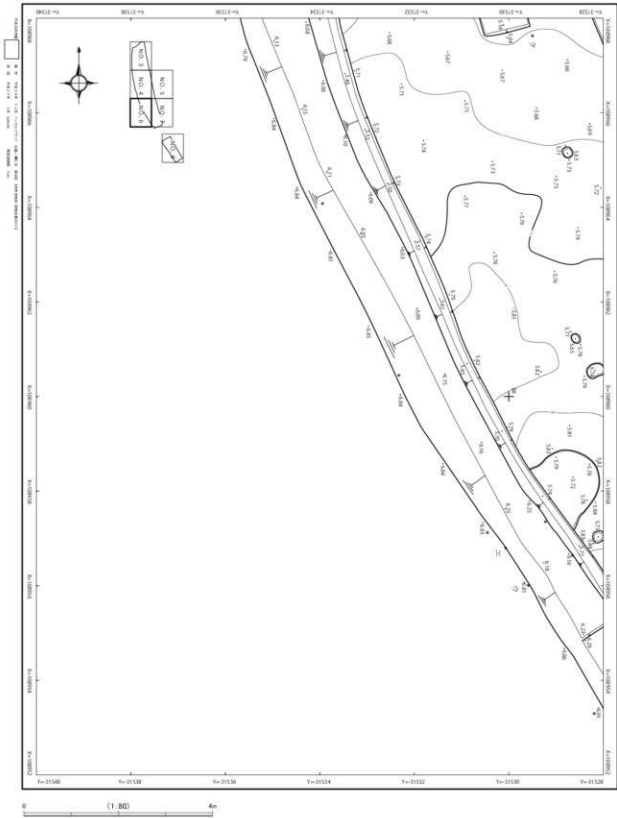




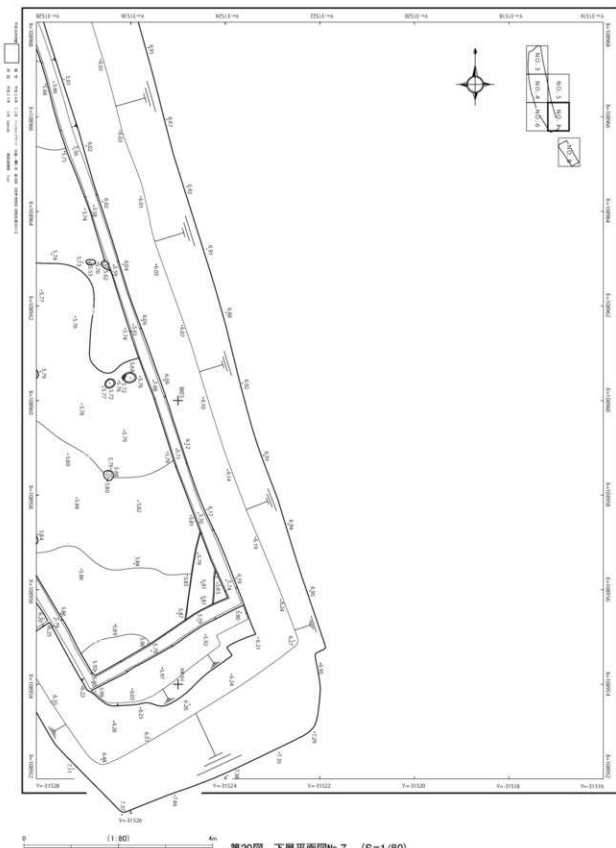
第15図 上層平面図No.4 (S=1/80)

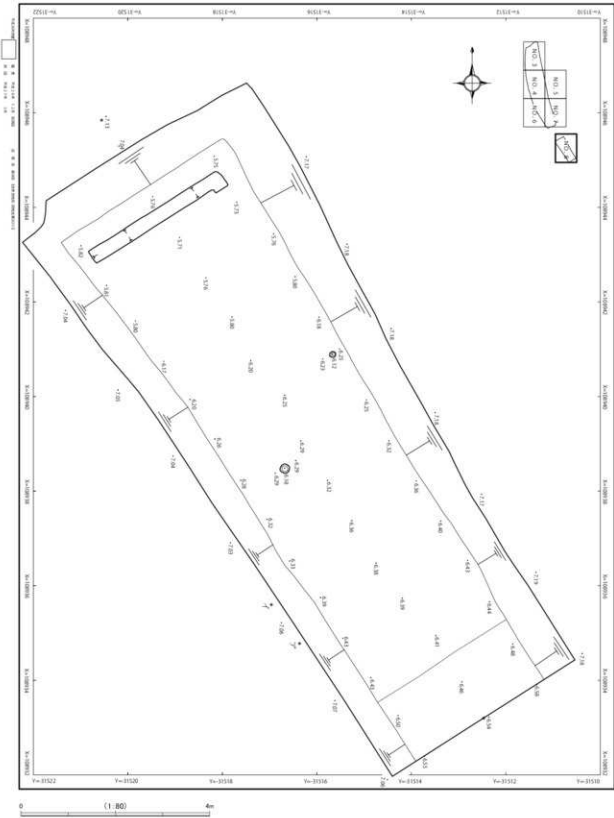


第16図 下層平面図No 3 (S=1/80)



第19図 下層平面図No.6 (S=1/80)





第21図 下層平面図No 8 (S=1/80)

第4章 総 括

今回の発掘調査において、最も時間を要したのは中央部北側に広がっていた土器包含層の掘削であった。暗灰色粘質土を基本として、明オリブシルトや砂が混じる厚さ10cmほどの層である。

出土した土器は主に古墳時代終末期から平安時代のもので、量的には古墳時代終末期の土器が多く、次に奈良時代の土器、平安時代の土器は少量である。これらは、西側からの出土が多いという傾向にあることから、現在集落のある西側高所が遺跡の中心部と推定され、そこからの廃棄あるいは流れ込んだものとみられる。また、土錘が18点出土しており、低湿地に近い集落での漁労活動の一端をうかがうことができる。

遺構は土坑が主体で建物などは確認できなかった。上層に伴う遺構はP1のみであり、古墳時代終末期頃の土器を出土したが、包含層のものが入りこんだ可能性もあり正確な時期は不明である。ほかには種実2点が出土したが詳細不明である。

下層では中央部北側に遺構が集まっている。トレンチなどにかかってしまい掘方など不明瞭な部分もあるが径1m前後、深さ0.2～0.4mほどの土坑と小穴である。遺構からの出土遺物はないが中央トレンチの下位掘削時に縄文土器が出土している。このことから下層の遺構は縄文時代晩期以降から古墳時代終末期までという年代幅が考えられる。性格としては、検出された位置が丘陵裾と低湿地の境にあることから貯蔵穴の可能性がある。

参考文献

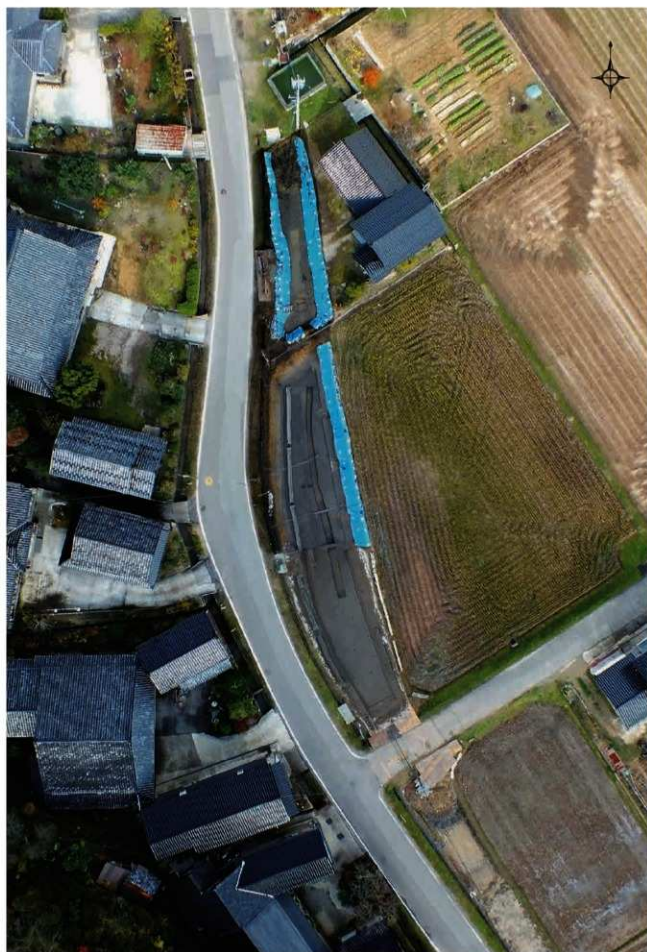
- 石橋克美・大畑喜代志 1991 『下甘田極楽寺山古墳群』 志賀町教育委員会
伊藤さやか・谷内明央 2004 『志賀町 館郷堂遺跡』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
河村好光 1982 『志賀町堀松古墳群』 石川県志賀町教育委員会
園崎善一・室矢幹夫¹⁾ 1981 『角川日本地名大辞典 17 石川県』 角川書店
櫻井甚一 1973 『志賀町の文化財』 第一輯 志賀町教育委員会・志賀町文化財調査委員会
櫻井甚一¹⁾ 1974 『志賀町史』 資料編第一巻 石川県羽咋郡志賀町役場
櫻井甚一¹⁾ 1980 『志賀町史』 資料編第五巻 石川県羽咋郡志賀町役場
沢辺利明・宮川勝次 2005 『志賀町 大坂古屋垣内遺跡』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
高橋勝喜¹⁾ 1955 『石川県羽咋郡旧福野岡周辺総合調査報告書』 『石川考古学研究会々誌』 第7号 石川考古学研究会
土屋宣雄・中島俊一 1998 『矢駄アカメ・イケダ遺跡発掘調査報告書—県営ほ場整備事業矢駄地区に係る埋蔵文化財調査報告書—』 石川県立埋蔵文化財センター
端 猛 2012 『福井ナカミチ遺跡』 『石川県埋蔵文化財情報』 第28号 (公財)石川県埋蔵文化財センター
端 猛 2013 『福井ナカミチ遺跡』 『石川県埋蔵文化財情報』 第30号 (公財)石川県埋蔵文化財センター
浪野伸雄・谷内尾晋司 1982 『中村畑遺跡』 『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
久田正弘¹⁾ 2004 『志賀町 穴口遺跡・穴口貝塚』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
宮本哲郎 2004 『末吉城跡』 『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ(加賀Ⅰ・能登Ⅱ)』 石川県教育委員会
谷内尾晋司¹⁾ 1984 『龍首モリガフチ遺跡』 『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 石川県立埋蔵文化財センター
米沢義光¹⁾ 1980 『志賀町米流遺跡—県営園場整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—』 石川県立埋蔵文化財センター



調査区遠景（北から）



調査区遠景（南から）



モザイク写真

0 (1:400) 20m



北部掘削終了（南から）



中央部北側上層検出状況



中央部北側上層遺物出土状況



中央部北側上層 P1 検出状況



中央部北側上層掘削終了（南から）

図版 4



中央部北側上層 P1 土層断面 (東から)



中央部北側上層 P1 完掘状況 (東から)



南部掘削終了 (北西から)



中央部北側下層遺構検出状況 (南から)



中央部北側下層掘削終了 (北から)



中央部北側下層 P3 土層断面 (南東から)



中央部北側下層 P2 土層断面 (東から)



中央部北側下層 P2・P3 完掘状況 (東から)



中央部北側下層 SK2



中央部南側遺構検出状況 (南東から)



中央部南側掘削終了 (南東から)



北部トレンチ 1



北部トレンチ 2



北部トレンチ 3



中央トレンチ東壁 (A4 グリッド付近)



中央トレンチ東壁 (A5 グリッド付近)



中央部北側下層 SK1 検出状況



東西方向土層断面 (北から)



中央トレンチ東壁 (A7 グリッド付近)



中央部西壁土層断面 (東から)



南部西壁土層断面 (東から)



北部作業状況



中央部北側包含層掘削作業





報告書抄録

ふりがな	しかまち にしよのみやさんまいだいせき							
書名	志賀町 二所宮サンマイダ遺跡							
副書名	地方道改築(一)羽咋田鶴浜線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	立原秀明、増永佑介							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2017年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしよのみや 二所宮 さんまいだい せき 遺跡	いしかわけん 石川県 はくいぐん 羽咋郡 しきまち 志賀町 にしよのみや 二所宮	17384	1536800	36度 58分 53秒	136度 48分 44秒	20141104 ～ 20150105	830㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二所宮サンマイダ遺跡	集落	古墳時代～ 平安時代	土坑		縄文土器、土師器、 須恵器			
要約	上下2面の遺構面を確認した。上層では古墳時代終末期から平安時代の土器が多量に出土する包含層を確認した。調査地は丘陵裾と低湿地の境に位置することから、丘陵側に遺跡の中心があり、そこからの廃棄あるいは流れ込みと推定される。下層では貯蔵穴の可能性がある土坑を検出した。時期は縄文時代晩期前葉以降とみられる。							

志賀町 二所宮サンマイダ遺跡

発行日 平成29(2017)年3月30日

発行者 石川県教育委員会

〒930-8575 石川県金沢市藤月1丁目1番地

電話 076-225-1842(文化財課)

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒930-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 ソノダ印刷株式会社